芥川賞受賞作品に表れた政治・経済・社会思想 1935-2000

本郷ゼミ（大橋侑季・栗山侑大・後藤雅樹・徐希錫・山本麻莉子・吉田衣里・
阿川竜昇・中村健二郎・峰晴由行・和田恵）

―概要―

本研究では、文学を活用した社会認識の可能性を探求するために、1935～2000 年の芥川賞受賞作品を考察対象とし、そこに表れた「経済」「社会」「政治」思想を抽出すると同時に、社会科学研究に役立ちうる新たな文学的リソースの発掘を試みた。

まず第Ⅱ節では、われわれの考察対象である各作品について、「経済」「社会」「政治」の３つのカテゴリーに当てはまる度合を評価・整理することを試みた。その方法は次の２つである。第１に、各作品を実際に読むことによって評価した。第２に、テキスト・マイニングの手法を用いて各作品の評価を再検討した。具体的には、各作品が収録されている『全集』を全て電子書籍化（テキスト・データ化）し、その各作品について単語の頻出度調査を行うことによって、各カテゴリーとの関連度を評価した。以上の結果から、芥川賞受賞作品の中には、経済・社会・政治思想を強く反映した作品が、数は少ないものの、確かに存在することが分かった。また、戦時中の言論統制のもとでは敵性語の排除運動があったはずだという仮説に基づき、同様のテキスト・マイニングの手法を用いて敵性語の排斥の有無を調査した。結果は、その仮説とは異なり、芥川賞受賞作品の中では敵性語の排斥傾向は見られなかった。

第Ⅲ節では、第Ⅱ節で検証した３つのカテゴリーに関連性の高い 10 の作品に焦点を絞り、それぞれの時代の経済・社会・政治の状況や思想と具体的に関係があるのか否かを、個別に考察した。10 作品とは、以下のものである。

受賞年	著者・作品名	キーワード
1935 上	石川達三『蒼茫』	昭和恐慌下での経済的困窮（特に農村地域が深刻）、海外移民
1941 下	芝木好子『青果の市』	戦時中の経済統制（特に流通過程）
1951 下	堀田善衛『広場の孤独』	日本人の戦後平和主義、朝鮮戦争
1960 上	北杜夫　『夜と霧の隅で』	ナチス、優生思想
1967 上	大城立祐『カクテルパーティー』	米国統治下の沖縄、国際親善の欺瞞
1974 下	日野啓三『あの夕陽』	国際結婚
1975 下	岡松和夫『志賀島』	戦中、戦後、九州
1980 下	尾辻克彦『父が消えた』	核家族化、社会福祉
1983 下	高樹のぶ子『光抱く友よ』	経済格差、女性差別
1988 下	李良枝『由熙』	在日韓国人、差別、アイデンティティ

その結果、それらは当時の時代背景を多分に反映しており、当時の経済・社会・政治を学ぶうえでも重要な小説であることが分かった。

Ⅰ　序 ―はじめに―

経済を学ぶうえで各分野の教科書や専門論文を読むことは不可欠だが、特に歴史系分野では、それらに加えて、当該分野を描いた古典的「小説」を読むという補助的方法もある。その長所は、その時代状況の（教科書等では得られない）生き生きしたイメージを得られる点にある。例えばイギリスの旧救貧法を学ぶさいに、救貧院に収容された貧しい孤児の人生を描いた C.ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』（*Oliver Twist*, 1838）を一読することは、非常に有益であると考える研究者も多い。

本研究では、文学を活用した社会認識の可能性を探求するために、1935～2000 年の芥川賞受賞作品を考察対象とし、そこに表象された「社会」「経済」「政治」思想を抽出すると同時に、社会科学研究における新たな文学的リソースの発掘を試みた。各小説の底本には、文藝春秋社の『芥川賞全集』（以下、『全集』と略す）を用いた。このような問題関心に基づいて同賞を扱った先行研究は皆無であり、初めての試みである。読み進めていく中で、「経済」に関する要素が薄かったため、「社会」「政治」まで範囲を広げることにした。

第Ⅱ節では、各作品について、経済・社会・政治の３カテゴリーに当てはまる程度の評

価を、①それらを実際に読むこと、および②テキスト・マイニングの手法（単語の頻度分析）によって行った。第Ⅲ節では、前節の結果をふまえ、評価の高かった 10 作品に焦点を絞り、これらの社会背景等を個別に考察した。その結果、これらの作品はそれらを生みだした歴史背景を強く反映しており、当時の社会認識を深めるための重要な文学的リソースであることが分かった。

Ⅱ　全体の考察

Ⅱ-1　各作品の評価：　実際に読むことを通じて

以下の表は、第１回から第 124 回までの受賞作品を読み、それらが「経済」「社会」「政治」の３つのカテゴリーに当てはまる度合を評価・整理したものである。具体的方法としては、ゼミ生 20 名全員でこれらの各作品を分担して熟読し、上の３つのカテゴリーに妥当する度合を、各担当者が「○△×」の３段階で評価した。こうした評価に主観性が混入することは避けられないが、この方法は人文科学系分野では、むしろ通常の評価方法と言えるだろう。

受賞作一覧

年度	作者・作品名	経済	社会	政治	その他
001 回 1935 上	石川達三 「蒼氓」	○移民	△	×	
002 回 1935 下	該当者なし				
003 回 1936 上	小田嶽夫 「城外」				
	鶴田知也 「コシャマイン記」	×	○先住民	×	
004 回 1936 下	石川淳 「普賢」	×独り言			
	冨沢有為男 「地中海」	×恋愛			
005 回 1937 上	尾崎一雄 「暢氣眼鏡」	×	○貧乏	×	
006 回 1937 下	火野葦平 「糞尿譚」	△	△	△	
007 回 1938 上	中山義秀 「厚物咲」	○労働	×	△戦争	
008 回 1938 下	中里恒子 「乗合馬車」	×	×	○	
009 回 1939 上	長谷健 「あさくさの子供」	△労働	△	△戦争	
	半田義之 「鶏騒動」	×	○	×	
010 回 1939 下	寒川光太郎 「密獵者」	△労働	×	×	
011 回 1940 上	受賞辞退 高木卓「歌と門の盾」	×	△	×	

012 回 1940 下	桜田常久 「平賀源内」	×	×	×	
013 回 1941 上	多田裕計 「長江デルタ」	△	×	○戦争	
014 回 1941 下	芝木好子 「青果の市」	○流通	×	△戦争	
015 回 1942 上	該当者なし				
016 回 1942 下	倉光俊夫 「連絡員」	○労働	×	○戦争	
017 回 1943 上	石塚喜久三 「纏足の頃」	×	△	×	
018 回 1943 下	東野辺薫 「和紙」	○	×	○戦争	
019 回 1944 上	小尾十三 「登攀」	○労働	○	×	
	八木義徳 「劉廣福」	△雇用	△差別	△満州	
020 回 1944 下	清水基吉 「雁立」	×	×	△戦争	
021 回 1949 上	小谷剛 「確證」	×恋愛			
	由起しげ子 「本の話」	×	△	△戦争	
022 回 1949 下	井上靖 「闘牛」	△興業	×恋愛		
023 回 1950 上	辻亮一 「異邦人」	×	○	○戦争・共産党	
025 回 1951 上	安部公房「壁」	×名前を失った主人公			
	石川利光「春の草」他	×			
026 回 1951 下	堀田善衛「広場の孤独」「漢奸」他	×	△	○戦争	
		経済	**社会**	**政治**	その他
027 回 1952 上	該当者なし				
028 回 1952 下	五味康祐「喪神」	×	×	△武士・剣・豊臣	
	松本清張「或る「小倉日記」伝」	×	△森鴎外	×	生の悲哀
029 回 1953 上	安岡章太郎「悪い仲間・陰気な愉しみ」				
030 回 1953 下	該当者なし				
031 回 1954 上	吉行淳之介「驟雨」他	×恋愛			
032 回 1954 下	小島信夫「アメリカン・スクール」	△	○	△	日米関係
	庄野潤三「プールサイド小景」	×会社の金を横領した男の妻の話			
033 回 1955 上	遠藤周作「白い人」	×宗教			
034 回 1955 下	石原慎太郎「太陽の季節」				
035 回 1956 上	近藤啓太郎「海人舟」	×	△	×	恋愛
036 回 1956 下	該当者なし				
037 回 1957 上	菊村到「硫黄島」	×	△	×	戦争
038 回 1957 下	開高健「裸の王様」	×子どもと大人の関係			
039 回 1958 上	大江健三郎「飼育」	×		△戦時・貧村で黒人を監禁	
040 回 1958 下	該当者なし				
041 回 1959 上	斯波四郎「山塔」	×自己探求？			

042 回 1959 下	該当者なし				
043 回 1960 上	北杜夫「夜と霧の隅で」	×	○ナチス	△	差別
044 回 1960 下	三浦哲郎「忍ぶ川」	△遊郭・運河		×	
045 回 1961 上	該当者なし				
046 回 1961 下	宇能鴻一郎「鯨神」	×捕鯨			
047 回 1962 上	川村晃「美談の出発」	×カキ屋・家族			
048 回 1962 下	該当者なし				
049 回 1963 上	後藤紀一「少年の橋」	×	△思春期	×	父
	河野多惠子「蟹」	×結核・日常描写			
050 回 1963 下	田辺聖子「感傷旅行」				
051 回 1964 上	柴田翔「されどわれらが日々―」		○学生運動・共産党		
052 回 1964 下	該当者なし				
053 回 1965 上	津村節子「玩具」	×	△夫婦	×	
054 回 1965 下	高井有一「北の河」	×	△母子家庭	×	
055 回 1966 上	該当者なし				
056 回 1966 下	丸山健二「夏の流れ」	×生活描写			
057 回 1967 上	大城立裕「カクテル・パーティー」	×	○沖縄・日中米		
058 回 1967 下	柏原兵三「徳山道助の帰郷」	△退役軍人・没落			
059 回 1968 上	丸谷才一「年の残り」	×幸福			
	大庭みな子「三匹の蟹」	×	△夫婦	×	
060 回 1968 下	該当者なし				
061 回 1969 上	庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」	×	○	×	東大入試挫折
	田久保英夫「深い河」				
062 回 1969 下	清岡卓行「アカシヤの大連」	×	△故郷	×	青春
063 回 1970 上	吉田知子「無明長夜」				
	古山高麗雄「プレオー8 の夜明け」	×	△独房生活（戦犯）		
064 回 1970 下	古井由吉「杳子」	×恋愛，心の病			
065 回 1971 上	該当者なし				
066 回 1971 下	李恢成「砧をうつ女」	×	○家族	×	
	東峰夫「オキナワの少年」	△占領下・貧困・思春期			
067 回 1972 上	畑山博「いつか汽笛を鳴らして」	×	△いじめ	×	在日朝鮮人
	宮原昭夫「誰かが触った」	×	○ハンセン病	×	偏見
068 回 1972 下	山本道子 「ベティさんの庭」				
	郷静子「れくいえむ」	△	○	△反戦	太平洋戦争
069 回 1973 上	三木卓「鶸」	×	○戦争	×	

070 回 1973 下	野呂邦暢「草のつるぎ」	×	○自衛隊	×	
070 回 1973 下	森敦「月山」	×	△	×	公害、環境
071 回 1974 上	該当者なし				
072 回 1974 下	日野啓三「あの夕陽」	×	○国際	×	国際結婚
072 回 1974 下	阪田寛夫「土の器」	×家族			キリスト教
073 回 1975 上	林京子「祭りの場」	×	○戦争	×	
074 回 1975 下	中上健次「岬」	×	×	×	
074 回 1975 下	岡松和夫「志賀島」	×	○戦争	○	
075 回 1976 上	村上龍「限りなく透明に近いブルー」	×ドラック			
076 回 1976 下	該当者なし				
077 回 1977 上	三田誠広「僕って何」	×	○紛争	×	
077 回 1977 上	池田満寿夫「エーゲ海に捧ぐ」	△経済用語	△恋愛	×	
078 回 1977 下	宮本輝「螢川」	×			
078 回 1977 下	高城修三「榧の木祭り」	×			
079 回 1978 上	高橋揆一郎「伸予」	×	○恋愛	×	
079 回 1978 上	高橋三千綱「九月の空」	×			青春
080 回 1978 下	該当者なし				
081 回 1979 上	重兼芳子「やまあいの煙」	×			
081 回 1979 上	青野聰「愚者の夜」	△	○	×	
082 回 1979 下	森禮子「モッキングバードのいる町」	×	○国際	×	
083 回 1980 上	該当者なし				
084 回 1980 下	尾辻克彦「父が消えた」	×	○家族	×	
085 回 1981 上	吉行理恵「小さな貴婦人」	×恋愛			
086 回 1981 下	該当者なし				
087 回 1982 上	該当者なし				
088 回 1982 下	加藤幸子「夢の壁」	△	△戦争	△	
088 回 1982 下	唐十郎「佐川君からの手紙」	×	△カニバリズム	×	ドイツ表現
089 回 1983 上	該当者なし				
090 回 1983 下	笠原淳「杢二の世界」	×家族			
090 回 1983 下	高樹のぶ子「光抱く友よ」	×	○家族	×	
091 回 1984 上	該当者なし				
092 回 1984 下	木崎さと子「青桐」	×	△恋愛	×	

093 回 1985 上	該当者なし				
094 回 1985 下	米谷ふみ子「過越しの祭」	×	○国際	×	
095 回 1986 上	該当者なし				
096 回 1986 下	該当者なし				
097 回 1987 上	村田喜代子「鍋の中」	×	○家族	×	認知症
098 回 1987 下	池澤夏樹「スティル・ライフ」	△	○哲学	△	株式
098 回 1987 下	三浦清宏「長男の出家」	×	○家族	×	
099 回 1988 上	新井満「尋ね人の時間」	×	△家族	×	離婚、家族
100 回 1988 下	南木佳士「ダイヤモンドダスト」	×	△戦争	×	
100 回 1988 下	李良枝「由熙」	△	○国際	○	環境資源
101 回 1989 上	該当者なし				
102 回 1989 下	大岡玲「表層生活」	×	△科学	×	
102 回 1989 下	瀧澤美恵子「ネコババのいる町で」	×	△国際	×	
103 回 1990 上	辻原登「村の名前」	×	△国際	△	国際結婚
104 回 1990 下	小川洋子「妊娠カレンダー」	×	○妊娠の非日常性	×	
105 回 1991 上	辺見庸「自動起床装置」	×	△睡眠	×	産業革命
105 回 1991 上	荻野アンナ「背負い水」	×恋愛			
106 回 1991 下	松村栄子「至高聖所アバトーン」	×大学生			
107 回 1992 上	藤原智美「運転士」	×			
108 上 1992 下	多和田葉子「犬婿入り」	×			
109 回 1993 下	吉目木晴彦「寂寥郊野」	×	○国際	×	
110 回 1993 下	奥泉光「石の来歴」	×	○紛争	△	大学紛争
111 回 1994 上	室井光広「おどるでく」	△	○	△	共産主義
111 回 1994 上	笙野頼子「タイムスリップ・コンビナート」	×			
112 回 1994 下	該当者なし				
113 回 1995 上	保坂和志「この人の閾」	×	△男女の日常	×	
114 回 1995 下	又吉栄喜「豚の報い」	×	○宗教	×	
115 回 1996 上	川上弘美「蛇を踏む」	×蛇			
116 回 1996 下	辻仁成「海峡の光」	△	△×少年刑務所	×	民営化 解雇
116 回 1996 下	柳美里「家族シネマ」	×	○家族	×	
117 回 1997 上	目取真俊「水滴」	×	△戦争	×	
118 回 1997 下	該当者なし				

119 回 1998 上	花村萬月「ゲルマニウムの夜」	×	△	×	米軍施設
119 回 1998 上	藤沢周「ブエノスアイレス午前零時」	×	○認知症	×	バブル崩壊
120 回 1998 下	平野啓一郎「日蝕」	×	△科学	×	宗教
121 回 1999 上	該当者なし				
122 回 1999 下	玄月「蔭の棲みか」	×	△	×	
122 回 1999 下	藤野千夜「夏の約束」	×	○	×	
123 回 2000 上	町田康「きれぎれ」	△	×	△	
123 回 2000 上	松浦寿輝「花腐し」	×	×	△	
124 回 2000 下	青来有一「聖水」	△	×	△	
124 回 2000 下	玄侑宗久「中陰の花」	△	×	×	

Ⅱ-2　各作品の評価：　テキスト・マイニングの手法を通じて

Ⅱ-1 に示した表は主観性を含むものであり、評価基準に差異があるという問題がある。そこで一つの客観的な手法として、本研究ではテキスト・マイニングを用いることにした。テキスト・マイニングとは、大量の文章データの中から、単語や文節の出現の頻度や、共出現の相関、出現傾向、時系列などを解析する、テキスト・データの分析方法である。

本研究では、考察対象である諸作品が収録されている『全集』を全て電子書籍化（テキスト・データ化）し、その各作品について単語の頻出度調査を行った。具体的には、経済・社会・政治の３カテゴリーに関連する単語をそれぞれ 50 個ずつ設定し、それらの単語の出現回数を検索にかけ、その多寡によって各作品の評価を再検討しようと試みた。経済的なワードの頻出度の多い作品ほど、豊かな経済思想を含んでいるとは単純に言い切れるものではないが、やはりそれだけ経済的内容を含んでいる可能性が高いだろうと考えられる。この手法を用いて量的データを加えることで、Ⅱ-1 に示した各作品の評価に一層の信頼性を与えることができるだろう。以下の２つの表は、各カテゴリーの検索単語一覧と、その頻出度の結果をまとめたものである。

カテゴリー	検索単語
経済	商売、商い、商人、貨幣、為替、価格、株、市場、景気、会社、生産、需要、供給、貿易、経済、投資、労働、税、人口、恐慌、流通、資本、企業、財閥、組合、働く、工場、家計、小遣い、金融、資産、経営、デフレ、インフレ、物価、輸出、輸入、商品、製品、賃金、通貨、産業、消費、失業、取引、雇用、負債、資金、銀行、財政
社会	格差、差別、夫婦、恋、家族、フェミニズム、出生率、マイノリティ、マジョリティー、ジェンダー、介護、福祉、育児、子育て、出産、闇市、教育、暮らし、医療、宗教、仏教、キリスト教、イスラム教、儒教、選民、

	優生、結婚、年金、平等、移民、疫病、職業、保険、役所、先進国、女性、隔離、運動、民族、紛争、原発、少子化、高齢化、グローバリズム、領土、平和、社会、社会保障、コミュニティ、治安
政治	ナチス、共産、戦争、自治、民主、首相、議会、国会、選挙、政党、内閣、爆弾、戦闘機、焼夷弾、手榴弾、法律、憲法、米軍、基地、統制、配給、物資、軍隊、軍事、軍人、兵隊、赤紙、天皇、勅令、GHQ、冷戦、右翼、左翼、外交、カネ、拉致、政策、参政、アメリカ、米国、デモ、議員、集会、革命、自衛、投票、条約、原発、政権、政治

		経済	**社会**	**政治**
1 回	石川達三 「蒼氓」	66	135	31
2 回	該当者なし			
3 回	小田嶽夫 「城外」	10	8	11
	鶴田知也 「コシャマイン記」	3	10	2
4 回	石川淳 「普賢」	18	24	9
	冨沢有為男 「地中海」	3	35	5
5 回	尾崎一雄 「暢氣眼鏡」	12	25	4
6 回	火野葦平 「糞尿譚」	57	31	70
7 回	中山義秀 「厚物咲」	15	22	4
8 回	中里恒子 「乗合馬車」	7	11	1
9 回	長谷健 「あさくさの子供」	26	37	12
	半田義之 「鶏騒動」	4	3	9
10 回	寒川光太郎 「密猟者」	3	1	1
11 回	受賞辞退 高木卓「歌と門の盾」			
12 回	桜田常久 「平賀源内」	14	14	1
		経済	**社会**	**政治**
13 回	多田裕計 「長江デルタ」	22	32	51
14 回	芝木好子 「青果の市」	235	25	15
15 回	該当者なし			
16 回	倉光俊夫 「連絡員」	13	12	59
17 回	石塚喜久三 「纏足の頃」	5	7	3
18 回	東野辺薫 「和紙」	36	6	17
19 回	小尾十三 「登攀」	21	34	4
	八木義徳 「劉廣福」	96	3	4

20 回	清水基吉 「雁立」	2	21	4
21 回	小谷剛 「確證」	37	27	1
	由起しげ子 「本の話」	31	20	4
22 回	井上靖 「闘牛」	51	15	6
23 回	辻亮一 「異邦人」	32	13	67
25 回	安部公房「壁」	6	10	34
	石川利光「春の草」他	6	15	1
26 回	堀田善衛「広場の孤独」「漢奸」他	93	55	266
27 回	該当者なし			
28 回	五味康祐「喪神」	0	1	0
	松本清張「或る「小倉日記」伝」	12	19	16
29 回	安岡章太郎「悪い仲間・陰気な愉しみ」	6	15	9
30 回	該当者なし			
31 回	吉行淳之介「驟雨」他	9	9	0
32 回	小島信夫「アメリカン・スクール」	3	15	46
	庄野潤三「プールサイド小景」	21	19	3
33 回	遠藤周作「白い人」	6	22	26
34 回	石原慎太郎「太陽の季節」	8	14	3
35 回	近藤啓太郎「海人舟」	2	16	2
36 回	該当者なし			
37 回	菊村到「硫黄島」	28	18	27
38 回	開高健「裸の王様」	40	19	11
39 回	大江健三郎「飼育」	2	4	16
40 回	該当者なし			
41 回	斯波四郎「山塔」	9	5	2
42 回	該当者なし			
		経済	社会	政治
43 回	北杜夫「夜と霧の隅で」	6	47	52
44 回	三浦哲郎「忍ぶ川」	12	14	0
45 回	該当者なし			
46 回	宇能鴻一郎「鯨神」	5	2	0
47 回	川村晃「美談の出発」	48	22	2
48 回	該当者なし			
49 回	後藤紀一「少年の橋」	15	14	4
	河野多惠子「蟹」	4	5	0

50 回	田辺聖子「感傷旅行」	22	44	15
51 回	柴田翔「されどわれらが日々―」	19	108	62
52 回	該当者なし			
53 回	津村節子「玩具」	22	31	2
54 回	高井有一「北の河」	1	0	13
55 回	該当者なし			
56 回	丸山健二「夏の流れ」	0	4	1
57 回	大城立裕「カクテル・パーティー」	10	48	106
58 回	柏原兵三「徳山道助の帰郷」	57	46	90
59 回	丸谷才一「年の残り」	15	28	15
	大庭みな子「三匹の蟹」	0	13	17
60 回	該当者なし			
61 回	庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」	13	78	35
	田久保英夫「深い河」	10	21	86
62 回	清岡卓行「アカシヤの大連」	25	52	76
63 回	吉田知子「無明長夜」	10	18	4
	古山高麗雄「プレオー8 の夜明け」	10	19	36
64 回	古井由吉「杳子」	3	17	0
65 回	該当者なし			
66 回	李恢成「砧をうつ女」	1	3	5
	東峰夫「オキナワの少年」	7	8	35
67 回	畑山博「いつか汽笛を鳴らして」	45	11	16
	宮原昭夫「誰かが触った」	8	25	4
68 回	山本道子 「ベティさんの庭」	15	55	4
	郷静子「れくいえむ」	73	37	155

上の表の結果は、若干の作品については大きな食い違いも見られたものの、Ⅱ-1 で示された評価結果と（期せずして）おおむね共通する結果が得られた。特に第１回『蒼氓』、第 14 回『青果の市』、第 26 回『広場の孤独』、第 47 回『夜と霧の隅で』、第 57 回『カクテル・パーティー』の５作品はどちらの結果からも高い評価結果が出たため、第３節でより詳しい研究を試みることとする。

なお、このテキスト・マイニングの問題点について、次の３点を指摘しておきたい。第１に、検索単語を選択するさいに生まれる恣意性である。本研究では、各カテゴリーに関連する検索単語を 50 個ずつ設定したが、この検索単語の設定方法には原理原則がないため検索単語に偏りが生じざるを得ないという問題点がある。

第２に、単語の各カテゴリーへの関連度に対する差である。例えば、差別や高齢化など

の単語の出現はそれだけで社会的な内容を含むといえるのに対し、家族や夫婦という単語の出現が果たして本当に社会性を表しているといえるだろうか。家族や夫婦というこれらの単語が社会性を含んだ表現として小説内で用いられていたかどうかは、この手法では知ることができない。にもかかわらず、これらの単語を同じ社会的ワードの１つとして扱うことにこの手法の限界があるだろう。

第３に、数字を狂わせる単語の存在である。本研究では、経済的ワードとして「株」、社会的ワードとして「運動」という単語も検索単語として含めたが、これらの単語は「切り株」や体を動かす意味での「運動」としても出現数に含まれている（ただし回数はそれほど多くはない）ため、正確な数値を得る単語としては問題がある。

Ⅱ-3　敵性語の排斥運動の有無

「敵性語」とは、敵対国や交戦国で使われる言語のことであるが、日中戦争・太平洋戦争中の日本では英語が敵性語とみなされ、日本語への言い換えが行われた。そこで本研究では、テキスト・マイニングによる１つの試みとして、1935～44 年までの作品を対象に、以下の敵性語から日本語への言い換えがどの程度行われたかを調べた。

	敵性語	日本語
食物	カレーライス、サイダー、フライ キャラメル、コロッケ	辛味入汁掛飯、噴出水洋天、軍粮精、油揚げ肉饅頭
動物	カンガルー、ライオン	袋鼠、獅子
花	カスタービン、コスモス、シクラメン、チューリップ、ヒヤシンス、プラタナス	支那油桐、秋桜、篝火草、鬱金香、風信子、鈴懸樹
楽器	サクソフォーン、トロンボーン、ヴァイオリン、コントラバス、ピアノ	金属製曲がり尺八、抜き差し曲がり金真鍮喇叭、提琴、妖怪的四弦、洋琴
スポーツ	ラグビー、ゴルフ、ハンドボール、クロール、アメリカンフットボール、バドミントン、サッカー、ウォータープロ、ホッケー、ピンポン、テニス、ボーリング、ビリヤード、バレーボール、ドッジボール、アイスホッケー、ゲートボー	闘球、打球、芝球、孔球、送球、速泳、鎧球、米式蹴球、羽球、蹴球、水球、杖球、卓球、庭球、投球十柱戯、撞球、排球、避球、氷球、門球、籠球、雪滑、氷滑、拳闘、突き上げ

	ル、バスケットボール、スキー、スケート、ボクシング、アッパーカット	
国	シンガポール、パールハーバー、日本アルプス	昭南島、真珠湾、中部山岳

		敵性語	日本語
1 回	石川達三 「蒼氓」	4	0
2 回	該当者なし		
3 回	小田嶽夫 「城外」	0	0
	鶴田知也 「コシャマイン記」	0	0
4 回	石川淳 「普賢」	0	0
	冨沢有為男 「地中海」	0	0
5 回	尾崎一雄 「暢氣眼鏡」	4	0
6 回	火野葦平 「糞尿譚」	0	0
7 回	中山義秀 「厚物咲」	0	0
8 回	中里恒子 「乗合馬車」	1	0
9 回	長谷健 「あさくさの子供」	11	0
	半田義之 「鶏騒動」	3	0
10 回	寒川光太郎 「密獵者」	0	0
11 回	受賞辞退 高木卓「歌と門の盾」		
12 回	桜田常久 「平賀源内」	0	0
13 回	多田裕計 「長江デルタ」	0	0
14 回	芝木好子 「青果の市」	0	0
15 回	該当者なし		
		敵性語	日本語
16 回	倉光俊夫 「連絡員」	1	0
17 回	石塚喜久三 「纏足の頃」	0	0
18 回	東野辺薫 「和紙」	0	0

19 回	小尾十三　「登攀」	7	0
	八木義徳　「劉廣福」	0	0
20 回	清水基吉　「雁立」	0	0
	合計	**31**	**0**

以上の表から 1935～44 年までの 21 作品の中から敵性語の出現は 31 回見られたが、日本語への置き換えは一度も見られなかった[1]。このことから、芥川賞受賞作品の中では敵性語の排斥傾向は無かったと考えられる。敵性語の排斥運動は、戦時期のナショナリズムの高まりの中で自然発生的に生まれた社会運動であり、法的根拠は無い。そのため、分野によってその運動の強弱に大きな差がある。新英・親米的な表現や、日本に批判的な表現を、作家個人が自粛した可能性はあるが、敵性語を忌避するほどの影響は無かったようである。

Ⅲ　作品ごとの考察

Ⅲ-1　石川達三『蒼茫』（第 1 回受賞作品・1935 年上）

(1) あらすじ

1930 年春、神戸三宮に実在した移民収容所が『蒼氓』の舞台である[2]。いわゆる「昭和恐慌」の影響は深刻であり、都市部に不景気をもたらしただけでなく、その影響は農村部にも及んでいた。当時の政府の緊縮政策に伴って、農産物、特に米価が暴落し、農村経済は疲弊していた。窮乏化した人々（特に東北地方などの農民）は、豊かな暮らしを求めてブラジルへ渡ることを決意する ―さまざまな不安と希望を胸に異国の地を夢見る彼らではあったが、そこで待ち受けているのが過酷な生活環境と労働であることを知らない―。『蒼氓』は、三宮の収容所でブラジルへの出航を待つ、そうした貧しい日本人移民たちの暮らしや内面を描くものである。

(2) 読み解き

作者の石川達三は秋田県出身であり、1930 年には実際に数ヶ月間ブラジルに滞在した。こうした経験をもとに『蒼茫』は描かれた。この作品の時代背景として、「昭和恐慌」を挙げなければならない。昭和恐慌は、1927 年のわが国の金融恐慌から、世界恐慌（29 年～）の影響を被った 30 年代初頭までの、一連の経済不況をさす。ときの総理大臣浜口雄幸（任期 1929 年 7 月～31 年 4 月.）が、旧平価での金本位制の復帰をめざし、井上準之助を大蔵

1　「突き上げ」や「拳闘」という言葉は数回出現したが、スポーツの意味で用いられていなかったため、ここでは無視した。

2　JR 元町駅から北に徒歩 15 分ほどの場所にあり、現在は「海外移住と文化の交流センター」（http://www.kobe-center.jp/access.html）として記念館になっている。

大臣に任命し、緊縮政策（円高・デフレ政策）を実施したことは有名である。これが不況をさらに深刻化させた。放漫経営をなくすための企業合理化政策も、皮肉なことに、一部の大企業だけが恩恵を受け、中小企業の相次ぐ倒産をもたらした。このような悪影響は農村地域にも広がった（いわゆる農業恐慌ないし農村恐慌）。猪俣津南雄『窮乏の農村―踏査報告』（猪俣 1934）は、昭和恐慌下の農村地域の窮状を生々しく描いた文献として非常に有名である[3]。『蒼茫』の社会背景には、これらの「昭和恐慌」と「農村恐慌」があり、当時のわが国の移民政策を理解するためには、こうした時代背景を知ることが欠かせない。

当時の日本経済は、昭和恐慌下で、「デフレ・スパイラル」および「資産デフレ」に陥っていた。「デフレ・スパイラル」は、浜口・井上政権の下で行った緊縮政策が、多くの人々に将来への不安を抱かせたために生じた。こうした心理的不安と物価下落が重なり、企業の業績は悪化した。そのことが、賃金切下げやリストラを通じて、所得の減少や失業者の増大をもたらした。そのことがまた、有効需要の減少と将来不安の高まりをもたらし、企業の業績が悪化するという悪循環が生じる。これは、現代でも起こりうる現象であり、長年にわたるデフレ不況を経験した日本でも、デフレ・スパイラルが見られた。

また「資産デフレ」は、株式・土地などの資産価格の継続的下落のことである。前述の緊縮政策は、資産デフレも引き起こし、資産保有者に損害を与えた。彼らの所得の減少は消費の減少につながり、これが景気をさらに悪化させた。

(3) まとめ

本節では、1935 年の芥川賞作品『蒼茫』のテーマである「移民」に着目し、当時の社会現状や、経済事情をいくつかの例を挙げて考察した。『蒼茫』には、日本を離れ、新天地での暮らしに不安を抱きつつも、希望を見出そうとする農村出身者たちの姿が描かれている。東北地方などの農村では「餓死」、「（若い女性の）身売り」さえ珍しくなかった時代、国内の生活に見切りを付け、海外に活路を見出そうとする人々が多数存在した。1930 年代初頭の昭和恐慌（特に農村恐慌）期の、そのような人々の状況や内面を生々しく描いた『蒼氓』は優れた経済小説であると言える。

最後に、作品の主要舞台である国立移民収容所（現「海外移住と文化の交流センター」に実際に取材に行き、当時の状況を実感することができた。快く取材を受け入れ、詳しく説明してくださったこと同センターの職員に、深く感謝したい。

Ⅲ-2　芝木好子『青果の市』（第 14 回受賞作品・1941 年下）

(1) あらすじ

築地青果市場で一家のために働く女性、八重の姿を描いた小説である。戦争へと突き進

---

[3]　昭和恐慌を含むわが国の 1930 年代の政治経済の概要については、中村（2007: 56-106）を参照のこと。また三和・原（2010: 120-36）には 1931～45 年のわが国の重要立法や統計データなどがまとめられている。

む世の流れは今までの商売のあり方を変えてしまい、商品の公定価格の設定や仲買人制度の規制が、八重や多くの仲買人を苦しめていく。八重は自らの商売の能力を活かす場所が奪われるという感覚に陥り、市場制度の移り変わりの中で、自らの一生について不安に思うようになる。

(2) 読み解き

この小説のキーワードは大きくわけると『仲買人』と『市場制度の変化』である。この小説の舞台である中央卸売市場が制定公布されたのは大正 12 年（1923 年）３月であったが、実際の開設をみたのは昭和 10 年（1935 年）であった。その目的は、旧来の卸売市場のように軒毎に値の異なる点を改め、明朗公正の取引をして適正卸売価格にすること、かつできるだけ迅速に商品が消費者の手に渡るようにすることであった。また各産地から各種の生産物が集まるので、品種改良や包装の改善・統一を促進しただけでなく、設備が完備しており開設者も衛生面に配慮したため、市場の衛生状態は良好になった。物はすべて会社側に送荷され、それを仲買人（旧問屋）が公開の糶売方法によって値を定めるという方法こそ当時の理想として実施されたのである。

しかしこの仲買人制度は戦争へと向かっていく世の中において、不必要なものになっていく。本文においても、「商売の仕方がすっかり変り、公定価格が定められて流動性が押えられ、この商売独特の勘のよさ、見越しの卓見によるぼろい儲けはまったく見られず、山気を押えられて地味に薄利一途で進むことより道がなくなったのである。果実の公定値が定められた上で、仲買人が七分、会社側が六分、小売人が三割と利潤の限度が出来たから、それ以内で一杯に売捌き、荷を動かすより術はなくなってしまった。今迄は制限なく値を糶上げていただけに、窮屈さや不安がひしひしと感じられるのである」(『全集』第１巻: 12)、あるいは「研究の結果、最大の方法として実施された中央卸売市場の糶による公開取引もわずか数年の命で、新しい時代の秩序にそうため、再び改革をよぎなくされることになった」（p.27）と述べられている。

仲買人制度が統制になった背景には、昭和 12 年（1937 年）７月に起きた日華事変がある。戦時経済下における膨大な戦費の支出は通貨の膨張を招き、またそれにつれて物価が上昇することになり国民の生活は困窮することになった。政府は様々な政策を講じたがインフレを止めることはできなかったため、昭和 14 年（1939 年）９月に国家総動員法を発動し、これに基づいて定められたいわゆる「価格停止令」によって一般の物資・料金については物価の上昇は抑えられた。しかし生鮮食料品は、その特殊性もあって適用を除外されたため物価の上昇が続いた。このため昭和 15 年（1940 年）８月に生鮮食料品の配給及び価格の統制に関する件が発せられ、せり制度の改変、卸売人手数料の低減、仲買人の口銭制限、荷主及び買出し人に対する奨励金の全廃が行われた。その一つ一つが中央卸売市場の運営に大きな影響を及ぼした。また同年３月に生鮮食料品としては初めて、食用うなぎに公定価格が設定されたのを皮切りに、翌年中にはほとんどの生鮮食料品の価格が公定

され、本格的な統制段階に入った。公定価格設定の結果、卸売価格は一様に低落したが、これと同時に、中央卸売市場への入荷量の激減、配給経路の著しい混乱、市場外のやみ取引の横行、品質の低下などの現象が生じて、生鮮食料品の流通に大きな変動を与えた。当時の理想の方法として行われた糶や仲買人が、戦争のために変化をよぎなくされたのである。その後、価格統制が国民生活の食生活の安定に利するものではないことが明らかになったため、昭和 16 年に配給統制規則を公布し、完全な配給統制時代に入った。これによって中央卸売市場本来の機能は事実上停止し、卸売人は配給機関となり、仲買人はすべて廃止された。

本文においては「ほかの物ならとも角、生物を扱っている商売がそう簡単に左右されるのかしら。魚なんか一時間の違いでも色が変ってしまえば値がぐんと違うから、よっぽど円滑な機関を作らない限り、仲買人を無くすことはできないと思うの」(『全集』第 3 巻: 23)、あるいは「生産者から消費者へという一元化はよく解る。公定値をきめて、原価にも制限がくれば糶で価格をきめる必要はないからね。あとは小売組合が適宜に運転すれば良いのだ。理論の上ではその通りだろう。しかし例えば同じ大根だって良いのと悪いのでは五倍も値が違ってくる。傷みやすい苺は刻々に値変りがくる。それらをどう処理して、公平に配給するか、実際の方法にはよほどの円滑さが必要なのだからね。そうしたことに我々経験者をつかわないのは損だと思うよ」(『全集』第 1 巻: 29) と述べられている。配給制度はその裏で闇取引や不正が行われていただろうし、物資の不足から遅配や欠配もあったであろう。配給制度が行われることで市場の経済活動は停滞し、生鮮食料品の品不足、悪品質、高価格を促した。物資が不足してどんなに価格が高騰しても本来あるべき経済活動を行うことは、配給制度より価格や品質や生産量の面でよりよいのではないだろうか。また当時５千人ほどいたと小説で記述される仲買人が職を奪われることで起こりうる問題を考えると尚更である。

戦後に仲買人に関する規定を設け、昭和 25 年（1950 年）頃に生鮮食料品の統制が全面的に解除された。「中間搾取」などと言われてはいても、正しい規定を設けて制限をつければ、仲買人は小説内での会話の通り、食料品の品質や価格を適正に判断できる必要不可欠な役割を果たしているといえよう。

(3) まとめ

『青果の市』では当時の東京卸売市場で働く八重を中心とした人物の姿が生き生きと語られている。また小説の会話文や感情からも当時の歴史事象に関することが読み取れた。選考員である久米正雄は「相当に感心した。しっかりした筆で、しかも素直に描いてあり、小説になっている。現在の時局に照らして見て、若干の危険性を感じはしたが、是は、決して一個の、世相批判ではない。賢明なる文化政策を執る人々は、恐らく此の作品を、充分許さるべき民の声として、真面目に聴いて呉れるだろう。――そう考えつつ、私は敢て是を推賞する」と評価している。この点からも、『青果の市』は当時の時代状況をよく反映

した作品であると言えよう。歴史書では単なる事象にすぎないことも、この小説を読み、当時の人々の暮らしや感情を感じることで、今までになかった新しい発見ができるはずである。

Ⅲ-3　堀田善衛『広場の孤独』（第 26 回受賞作品・1951 年下）

(1) あらすじ

サンフランシスコ講和条約の締結前の（すなわちアメリカ占領下の）日本が舞台である。朝鮮戦争のさなか、日本はアメリカ軍の基地ないし生産拠点としての非常に重要な役割を担っていた。ある新聞社の臨時職員である主人公「木垣」は、北朝鮮軍を日本の「敵」と書くべきか否かに疑問を感じる。当時の日本では、朝鮮戦争を、日本再建の好機と見る者もいれば、革命の好機と見る共産党員もいた。しかし第二次大戦中の悲惨な経験を通して、彼は戦争自体をひどく嫌悪していた。ところが彼は、戦争とは一見無関係に見える自分の現在の仕事や生活が、実は根源的なところでは隣国である朝鮮の戦争に結びついているのではないか、すなわち実は自分も戦争に「コミット」しているのではないか、という疑いを抱き始める。彼はそのようなコミットメントを避けるために、日本の現実から逃避しようと試みるが、結局はそれも不可能であることに気づく。そして彼は、自分自身の生き方をするべく、厳しい現実に背を向けるのではなく、むしろ頭から飛び込んでゆく（コミットする）決意に至る。こうして彼は、亡命資金である外国紙幣をみずからの手で焼くのであった。

(2) 読み解き

「広場の孤独」は堀田が 1951 年に発表し、翌 52 年に芥川賞を受賞した小説である。本稿の考察範囲に含まれる芥川賞受賞作品の中で、この小説は、当時のわが国の政治情勢を最も強く反映している作品の１つであることは間違いない。第二次大戦後、日本人は平和国家として歩みたいと願いながらも、主人公「木垣」のような日本の知識人たちは、朝鮮戦争の現実にどう向き合うか、どのように生きるべきかについて、深く苦悩した。この作品のテーマは、平和と戦争の時代における人間の日常生活の在り方を根源的に問い直すことであると言ってよい。すなわち、平和な生活を営んでいるからといって、自分は戦争とは無関係だ（コミットしていない）と言えるだろうか、と問うているのである。このように「広場の孤独」は、確かに（時代を越える）普遍的・根源的な問題を提起しており、一級の政治小説と言えるだろう。

Ⅲ-4　北杜夫『夜と霧の隅で』（第 43 回受賞作品・1960 年上）

(1) あらすじ

第二次世界大戦中、ドイツではナチスの「T４作戦」により、「生きるに値しない生命（精

神障害者・身体障害者など)」と見なされた人々を殺害する政策が行われた。そのような状況下でドイツ南部の病院に勤務する精神科医の主人公ケルセンブロックは、その政策に疑問を感じ、患者を救う手立てはないか、苦悩する。患者の中に高島という日本人がいた。彼はユダヤ人の女性アンナと結婚しており、彼女が迎えに来ることをずっと信じていた。高島は重症ではなかったのか、退院できるまでに回復する。しかしアンナが死んだということを知った高島は、退院前に自殺してしまう。極限状態における人間の不安、矛盾が描かれた作品である。

(2) 読み解き

この作品のキーワードは、「ナチス」と「優生思想」である。作品の舞台は第二次世界大戦中のナチス統制下のドイツであり、そこでは優生思想（国民を優れた民族へと品種改良することが必要だという考え）に基づき、優れた血統・民族をより繁栄させるために多産の母親を表彰するなどの施策が行われた。一方、犯罪者や遺伝病の患者、またそこから飛躍して遺伝的要素がないとされている精神障害者や身体障害者さえも淘汰の対象とされ、断種措置などが行われた。すなわち、秘密裏に病院などの施設で淘汰の対象とされた「生きるに値しない生命」を安楽死させる「Ｔ４作戦」である。こうした政策が公に知られるに至り、キリスト教会の一部からの強い反発もあって、安楽死政策は表向きは中止されたものの、実際にはその後も、小規模な形で継続されていた。

以下に示すような作品中の会話は、優生思想に基づく諸政策を、医学的にある程度まで正当化するものであると言えるだろう。

> 「遺伝因子がこれだけ強い場合、一体そのほかの処置が考えられますかね。こういうときに必要なのは、理性、ただこいつだけだ。感情という奴はいつだって最も低級な形式にすぎない。大体なんのために優位遺伝なんて言葉があるのだ?断種は理性的で道徳的で、僕に言わせれば、むしろ宗教的でもあるね。殊に安死術ともなれば、こいつはたしかに宗教的だ」。
> 「ああいうことが実際に行われるなんて噂はばかげたことだ」。
> 「合法的といっても悪いものだってあります」
> 「…中略… 社会と国家の損失以外なにがあるかね？なんのために遺伝学があるのかわからなくなるね。 それとも一切は魔がついた世に帰ればいいとでもおっしゃるのですかね」。
>
> (『全集』第 6 巻: 51-53)

しかし、ナチス親衛隊が病状の回復しない患者を引き取りに病院を訪れたとき、主人公は、政策の必要性への疑いと医者としての無力感から、どうにかして患者を助けようと無謀な試みともいえる「治療」を始めてしまう。このように、この小説では、ナチスの優生

思想に基づく政策に振り回される主人公が描かれており、当時のドイツ国民さえ、必ずしも優生思想に賛同していなかったのではないかと推測できる。

(3) まとめ

『夜と霧の隅で』は、当時のナチス・ドイツの極端な優生思想に戸惑う精神科医が、患者をなんとか治療しようと努め、職務に実直であるがゆえに苦しむ姿を、生々しく描いている。それは、単なる歴史的事象としてではなく、当事者としてこの問題に関わる形で描かれている。そのことが、私たちの生活の中に今なお残存する優生思想（例えば出生前の遺伝子検査など）という人権に関わる問題を考えるきっかけを読者に与えるのである。この点において、同作品は普遍的な問題を提起した第一級の社会小説だと言うことができる。

Ⅲ-5　大城立裕『カクテル・パーティー』（第 57 回受賞作品・1967 年上）

(1) あらすじ

本土復帰以前の米国統治下の沖縄が舞台。内地の新聞記者「小川」、中国人弁護士の「孫」、沖縄人の「私」はカクテル・パーティーの主催者であるアメリカ人の「ミラー」と中国語会話のグループを作っていた。その親交もあり、主人公の「私」は米軍基地内にあるミラーの家で開催されるカクテル・パーティーに招かれる。「私」が他の 3 人と論議を交わしながらパーティーを楽しんでいる時、「私」の娘が事件に巻き込まれる。「私」の家の離れに居候していた米兵「ロバート・ハリス」によって暴行された娘は米兵を崖から突き落とし怪我を負わせたため逮捕されてしまう。主人公の「私」は娘が裁かれるのならば米兵も裁かれるべきだと考え、カクテル・パーティーの参加者に協力を仰ぐのだが。カクテル・パーティーを通じた国際親善の欺瞞が事件によって暴かれていく。

(2) 読み解き

この小説のキーワードは「米国統治下の沖縄」、「国際親善の欺瞞」である。1945 年に日本がポツダム宣言を受諾し無条件降伏をしてから 72 年に沖縄が返還されるまで、沖縄は米国統治下にあり、それが沖縄に住む人々及び生活に大きな影響を与えていた。この作品の背景にあるのは、戦後の米国統治下におかれた沖縄に住む人々の境遇である。特に本作品においては、主人公の娘が米兵から暴行を受けるが裁判で勝ち目がなく、そもそもまともに裁判すらおこしてもらえないという部分に沖縄が米国統治下において権限を持っていなかったことが非常に現実的に描写されている。本文では「しかし、その次の説明でお前は完全に息のつまる思いがした。その一、軍の裁判は英語でおこなわれる。のみならず、強姦事件というものは、この上もなく立証の困難な事件であって、勝ち目がない。ふつう、告訴しないように勧告しており、すでに告訴したものでも、事実取り下げた例が多い。その二、琉球政府の裁判所は軍要員に対して証人喚問の権限を持たない。被告人が正当防衛を主張したところで、ロバート・ハリスを証人として喚問しない限り、その立証は不可能

であろう」(『全集』第 7 巻: 241-42）と述べられている。つまり、米国側の人間にとって常に有利な立場が確立されていることをこの一節から読み取ることが可能である。被害にあった女性たちが泣き寝入りとなってしまう現実と裁判自体が無意味であるといった表現が、この場面以降も主人公の「私」とカクテル・パーティーに招かれた中国人弁護士の孫、パーティーを開催したアメリカ人のミラー、新聞記者の小川の間で展開される。なお、本作品に影響を与えた「由美子ちゃん事件」という実際の事件が存在する。「由美子ちゃん事件」は 1955 年に沖縄在住の 6 歳の少女に対し米兵が数回にわたり性的虐待を行い、その後少女を殺害した事件である。一度は死刑判決を受けた米兵であったが、米兵が死刑囚としてアメリカに送還されたのち、45 年間の重労働刑へと減刑された。この判決をうけて沖縄の日本復帰を求める声がさらに大きくなっていった。また、1950 年代には米兵による事件や核の持ち込み、復帰弾圧運動が行われた。これを受けて 60 年には沖縄祖国復帰協議会が結成された。このような歴史的背景のもとで、本作品は米兵の治外法権や米国占領下の沖縄の諸問題について取り上げた作品であるといえる。

作品内の登場人物たちのやり取りの中で、主人公の娘の事件に関する話題から国際親善とは一体何であるのかという疑問に移り変わっていく。本文おいては「孫　怨恨を忘れて親善に努める―二十年間の努力というのはそれです。それを、あなたは破壊した。…中略… 一応、立派な論理です。しかし、あなたは傷ついたことがないから、その論理になんの破綻も感じない。いったん傷ついてみると、その傷を憎むことも真実だ。その真実を蔽いかくそうとするのは、やはり仮面の論理だ。私はその論理の欺瞞を告発しなければならない。…中略… 孫先生。私を目覚めさせたのは、あなたなのです。お国への償いをすることと私の娘の償いを要求することは、ひとつだ。このクラブに来てからそれに気づいたとは情けないことですが、このさいおたがいに絶対的に不寛容となることが、最も必要ではないでしょうか。私が告発しようとしているのは、ほんとうはたった一人のアメリカ人の罪ではなく、カクテル・パーティーそのものなのです」（pp.264-65）にと述べられている。この部分から、カクテル・パーティーという「国際親善の欺瞞」が作者からの問題提起であることが読み取れるだろう。沖縄という一つの場所に異なる国の人々がいる。その現実をふまえ、異なる立場にある人間同士が戦争という歴史を経験した上で、真の国際親善とは何かということが問われているのである。また作品の後半部分では、昔も現在も沖縄が被害者であるという主張が通有とされているが、戦争における加害性というものも主張されているのである。

(3) まとめ

『カクテル・パーティー』では、主人公の娘が米兵による暴行を受けたという事件から国際親善の欺瞞が暴かれていく過程を、登場人物たちの会話の中から読み解くことができる。この作品は、単に米国占領下の沖縄の表面的な諸問題を提起した小説ではない。様々な国の立場から見た戦争の加害性や、世界各国が国際親善という名の仮面をかぶっている

のではないか、という根源的な問題を扱った小説であるといえよう。作者が本作品を通して提起した問題は、今なお答えが出ないままでいる。この作品を読み解くことは、戦後の史実を表面的・外面的に捉えるのではなく、戦争を経験した各国がどのような思いを抱えていたのか、沖縄の人々の内面的境遇、真の国際親善とは何かといった諸問題について、再考する一つの手段になりうるだろう。これこそがこの文学作品を読み解く意義である。

Ⅲ-6　日野 啓三『あの夕日』（第 72 回受賞作品・1974 年下）

(1)あらすじ

作者が読売新聞の初代特派員としてソウルに赴任したときのことが描かれている。主人公はソウルへの半年の特派員を終えて日本へと帰国する。特派員時にソウルで女性と知り合った。日本で妻がいる主人公であるが、終戦によって飛行機設計家になるという夢を破られ、その後の人生にやる気をなくし、高校ももともと希望であった理科ではなく文科に進み、特に興味のなかった新聞社へと就職するなど、投げやりであった彼は妻との結婚も望んでいたことではなかった。

(2)読み解き

少年期を朝鮮で過ごした作者は、敗戦後日本で高校へ進み、その後東大から、読売新聞社へと就職する。その後は「あの夕陽」の内容と同じように過ごし、妻とは離婚、知り合った朝鮮人の女性と結婚することとなる。作者の実体験に基づいて描かれている。1910 年（明治 43 年）8 月 29 日、韓国併合ニ関スル条約に基づいて大日本帝国が大韓帝国を併合した。在日朝鮮人問題はここから始まったといっても過言ではない。作者が生まれた 1929 年以来、在日朝鮮人の割合はうなぎ上りに増加し、1945 年の終戦の年にピークに達している。作者の父親は銀行員としてソウルへ駐在するが、そのころは併合によって朝鮮が実質的に日本の植民地と化していたことと関連がある。その後敗戦により植民地化が解除され、多くの在日朝鮮人が国外へ戻るとともに、作者たちは日本へ戻ってきている。

(3)まとめ

国際的な内容が含まれる本としてこの本を選定したが、これに限らず特に在日に関するものが多く見られた。筆者の体験がそのまま、小説の中に投影される私小説の本が多数あり、実体験・経験を書いているために現実味を帯びていた。また作者の生まれた年代により作風や、在日の状況に対する表現が異なっていた。

Ⅲ-7　岡松　和夫『志賀島』（第 74 回受賞作品・1975 年下）

(1)あらすじ

戦中から戦後の九州の博多などが舞台。小学校のクラスメイト 2 人の戦前から終戦後を描いた作品だ。一人が志賀島の海での訓練中におぼれるところからスタートする。主人公の宏と友達の竹元が戦争によって自分と自分たちの周りの生活が変わっていった様子が書かれている。

(2)読み解き

主人公自身の人生と、出家して仏道を修行することとなった友人の人生、敗戦直前、直後の日常の一部を切り抜いたような作品。戦争中の少年の友情の物語は、戦争のいたましさをさらに濃くさせている。爆撃機による空からの襲撃の悲惨さや、日本に進駐していた連合国軍に対し戸惑う人々の思いを晴らす術がない。

(3)まとめ

受賞年代が 1930 年前半から 1996 年までの作品からリストアップした。当時の時代背景として高度経済成長、1980 年代初頭における核家族化のピーク、三世代世帯の割合の上昇単独世帯の増加他家族形成にかかわるであろう、様々な変化の中で、移りゆく「家族」を受賞作品より垣間見る。そのためこの分野では、主に社会思想について中心の考察となる。

Ⅲ-8　赤瀬川原平（尾辻 克彦）『父が消えた』（第 84 回受賞作品・1981 年）

(1)あらすじ

父親の死を題材にした作品。母子家庭で父親を知らない主人公が、八王子にあるという父親の墓参りに知人と行く間、過行く景色の合間にこれまでに転勤が多かったこともあり様々な地方へ移動した記憶の中での父とのかかわり、地方や横浜へ就職していった兄兄弟や姉家族の中での父親の他、父を取り巻く親族とのかかわりなど家族として過ごしてきた過去を振り返る。

(2)読み解き

作者は 1937 年に生まれ小学生の時に敗戦している。兄弟姉妹共に芸術的なことが好きであり作者も例にもれず絵が好きだった。寝小便の癖が治らず中学 3 年までしておりコンプレックスでもありこのコンプレックスが自意識を目覚めさせたと他の本で述べている。そののちに美術学校へと進学し、芸術活動にもいそしんでいた。本作中の「私」の特徴が作者本人と類似している点もあり事故の体験談をまたは体験談をもとに書いた本と推測が出来る。受賞年度が 1981 年であるが、この前年に日本は核家族化のピークを迎えておりまた 1980 年以降は共働き人口の増加が見られるなどこの時代は家庭環境の変化が現れ始めた時代である。(平成 18 年版　少子化社会白書、中央企業庁：第 3 節　家庭と地域社会の変化等)。1979 年に発表された「新経済七ヵ年戦略」もありこれまでの個人としての活力から家庭や近隣社会の人間的つながりに再び目が向けられ「家族」というものを考え直す時代の

半ば、更には社会福祉改革さなかでの社会的風潮を受けていると考えられる。

(3)まとめ

三鷹から中央線に乗って高尾の墓地に向かう現実と、主人公の過去が交錯する私小説であった。いくつかは作中内でも受賞時代の風潮などの表れか多少なりと経済格差などに触れている部分はあるものの本題としては「人の闇」「人と人とのかかわり」など対人関係に重点が置かれている。当時の政策や風潮を考慮しても作品の受賞については多かれ少なかれと時代の評価を受けているとも考えられる。

Ⅲ-9　高樹　のぶ子『光抱く友よ』(第 90 回受賞作品・1983 年)

(1)あらすじ

アル中の母親を守ることを生きる「光」とする不良少女・松尾勝美と、彼女の母の「秘密」を共有する優等生・相馬涼子の友情物語である。献身的に尽くす娘勝美を罵る母親の言葉に逆上し、京子は友を庇おうとして秘密の一端を口にし、心ならずも友を裏切る。最終的に友より母を選ぶ勝美の選択に、他人には伺い知ることのできない母と娘の絆が象徴的に描かれている。17 歳の 2 人の女子高生の出会いと別れを通して、初めて人生の「闇」に触れた少女の揺れ動く心を清冽に描く作品。

(2)読み解き

周囲の期待を背負って生きてきた主人公が、不良少女と関わりはじめ、今まで気付かなかった世界を知り、生きることの難しさを感じる様子と、不良少女の母親やその周辺の人々が力強く、生き生きと生活する様子が描かれている。思春期の安定しない精神、大人に対するあこがれ、不安、恐怖という様々な心理的描写で語りかける。どれだけだらしない母親であっても、不良少女はどこまでも支えることをやめないプライドをもっており、それを「光抱く」と言い表した。

(3)まとめ

作者は 1946 年に生まれた。この時代は戦後の混乱期であり、いわゆる団塊世代にあてはまる。この時代に生まれた人の大学進学率は 15%～20%程度と低く、大半の高校卒業生は就職した。高校にさえ進学せず、中学卒業後すぐに就職する者も多かった。団塊の世代の大学受験事情について、経済的に貧しい時代で、国立大学の競争は激しかった。また、裕福な家庭また女性の場合は、学力が高く経済的に余裕があっても「女に学問はいらない」という考え方が残っていた。大学進学を目指す涼子と、高校には入っているが真面目に授業はでず、仕事をしている勝美の対比は貧しい時代における経済的な格差を感じられる。また涼子の父が大学で、女性が勉強することに難色を示しているシーンから「女に学問はいらない」という当時の考え方を反映させているように見られた。また、この当時の考え

方については内閣府発表の年少労働者の生活と意識に関する調査（昭和 39 年 03 月）、母親の科学知識等に関する世論調査（昭和 39 年 03 月） にて詳しく知ることが出来る。

Ⅲ-10　李 良枝『由熙』（第 100 回受賞作品・1988 年上）

(1)あらすじ

W 大学を中退した、在日韓国人の主人公由熙が韓国留学半ばで日本に帰るところからはじまる。在日韓国人として日本に生まれた由熙だが、自らのルーツを求め、母国への理想を抱いて韓国の名門 S 大学に留学したが、韓国と韓国人の生活に違和感を抱き、まるで外国のような母国に愛情を抱けずに日本に帰る。

(2)読み解き

作者、李良枝(イ・ヤンジ)は主人公である由熙と自分を照らし合わせてこの作品を書いた。その類似・相違点に注目した。韓国で大学を卒業している点が異なり、大学名は伏せられているが共通している。在日外国人として生まれた作者は、青春時代を差別と偏見を受けて育ち、若くして急逝した。この作品は作者がアイデンティティを求め生きた記録であるといえるだろう。

「日本語の文字を書く由熙の癖や印象が、ハングルにそのまま現れていたことを私は思い返していた。由熙が書く日本語と韓国語の二種類の文字は、両方とも書き慣れた文字という印象を与え、またどことなく大人びていたが、やはり由熙のそのもののように不安定で、不安げな息遣いを隠し切れずにいるようだった。」

（『全集』第 14 巻: 362）

(3)まとめ

在日朝鮮人（韓国人）の日本での差別については多く知られているが、彼らの本国（韓国、北朝鮮）は彼らにどのような扱いなのか？在日にとって日本の偏見にもまして悲しいことは本国の無関心と差別である。1945 年の解放以来、南北双方ともに、在日に対する本国の政策は、本質的に「棄民」ないし「搾取」だったと言ってよい。韓国は在日を援助せず、捨て子扱いにしてきた。在日が里帰りすると、本国の人々は、本国への送金や投資をねだって寄生した。北朝鮮はさらにあくどい。朝鮮戦争の戦後復興のため、絶対的な労働力不足に陥った北は、わが国こそ「地上の楽園」だとするプロパガンダを流し、在日を巧みに北へ誘導した。その結果、在日 10 万人が北への帰国を選択した。彼らは、絶大な差別と偏見に苦しみ、飢餓と貧困の中で絶望の日々を送っている。北は彼らを人質にして、在日親族から毎年数十億円のカネを絞り上げている。本国にとって、「在日」の存在は、日本へ政治的圧力をかけるカードにもなるし、経済的な助力は受けられるし、誠に都合の良い存在であって、それ以上ではないのである。

Ⅳ　まとめ

本研究では、文学を活用した社会認識の可能性を探求するために、1935～2000 年の芥川賞受賞作品を考察対象とし、そこに表象された「経済」「社会」「政治」思想を抽出すると同時に、社会科学研究に役立ちうる新たな文学的リソースの発掘を試みた。文学作品は社会を映し出す鏡であると言われる。

そこでまず第Ⅱ節では、われわれの考察対象である各作品について、「経済」「社会」「政治」の３つのカテゴリーに当てはまる度合を評価・整理することを試みた。その方法は次の２つである。第１に、各作品を実際に読むことによって評価した（**Ⅱ-1**）。第２に、テキスト・マイニングの手法を用いて各作品の評価を再検討した。具体的には、各作品が収録されている『全集』を全て電子書籍化（テキスト・データ化）し、その各作品について単語の頻出度調査を行うことによって、各カテゴリーとの関連度と評価した（**Ⅱ-2**）。以上の結果から、芥川賞受賞作品の中には、経済・社会・政治思想を強く反映した作品が、数は少ないものの、確かに存在することが分かった。また、戦時中の言論統制のもとでは敵性語の排除運動があったはずだという仮説に基づき、同様のテキスト・マイニングの手法を用いて敵性語の排斥の有無を調査した。結果は、その仮説とは異なり、芥川賞受賞作品の中では敵性語の排斥傾向は見られなかった。

第Ⅲ節では、第Ⅱ節で検証した３つのカテゴリーに関連性の高い 12 作品に焦点を絞り、それぞれの時代の経済・社会・政治の状況や思想と具体的に関係があるのか否かを、個別に考察した。その結果、当時の時代背景を多分に反映しており、当時の経済・社会・政治を学ぶうえでも重要な小説であることが分かった。

今後の課題としては、主に次に２点が挙げられるだろう。第１に、考察範囲をより広げることである。具体的には、①（本研究では 1935～2000 年までを考察範囲としたので）2000 年以降から現代までの受賞作品、②本研究で検証した 10 作品以外の作品、③ノミネート作品や直木賞の作品、等が挙げられる。第２に、本研究ではテキスト・マイニングの手法として、シンプルであるが最も効果的であると思われた「単語頻出度分析」を用いたが、より高度な手法を用いることも検討していきたい。

【参考文献】

1. 『芥川賞全集』（本研究では第１巻から第 19 巻まで使用）文藝春秋、1982

2. 猪俣津南雄『窮乏の農村：踏査報告』改造社、1934
3. 菰田文男・那須川哲哉（編）『ビッグデータを活かす　技術戦略としてのテキストマイニング』中央経済社、2014
4. 那須川哲哉『テキストマイニングを使う技術／作る技術』東京電機大学出版局、2006
5. 中村隆英『昭和経済史』岩波文庫、2007
6. 三和良一・原朗（編）『近現代日本経済史要覧』改訂版、東京大学出版会、2010

インターネット等

1. 東京中央卸売市場 HP　　http://www.shijou.metro.tokyo.jp/
2. 海外移住と文化の交流センター　　http://www.kobe-center.jp/
3. 内閣府「年少労働者の生活と意識に関する調査（昭和 39 年 3 月）」http://survey.gov-online.go.jp/s38/S39-03-38-22.html
4. 内閣府「母親の科学知識等に関する世論調査（昭和 39 年 3 月）」http://survey.gov-online.go.jp/s38/S39-03-38-21.html